

日付:2015年5月24日／聖書:使徒言行録20:17～24

主題:「聖霊に迫られて」

パウロは第三回伝道旅行を終えて、エルサレムに帰ろうとしている。ただ喜んで帰ると言うものではない。パウロが異邦人伝道で様々な律法解釈をし、異邦人キリスト者を生み出していることに、エルサレムではパウロに対する抗議、怒りに満ちた状況が、ユダヤ人キリスト者の中にはあった。例えば、異邦人も割礼を受けなければ救われぬとか、食べ物の規制に対しても、そのような律法をも越えて、神の救いはあるんだと言うパウロの解釈には、どうしても許せないユダヤ人キリスト者がいたわけである。パウロを探してでも捕まえたいと思っている人が沢山いるところに帰ろうとしているわけだが・・・。

パウロの決意は、「投獄と苦難とがわたしを待ち受けている」と分かっているエルサレムへ向かう。このエルサレム行きに対して、泣いて止めようとしていた仲間もいた(36、37節)。それ程に決意して、エルサレムに向かうのは何故か？ パウロには、キリストの救いの恵みは、エルサレムに留まるものではなく、広く、世界に伝える必要があり、律法をも越える寛大な神のご配慮があることを、エルサレムのキリスト者にも伝えなければならないという、迫りがあったのであろう。

22節では「今、わたしは、“霊”に促されてエルサレムに行きます」とあるが、この「促されて」は、少し優しい表現のように思う。直訳すると「霊に縛られて」エルサレムに行くというふうになる。ただ無理やり聖霊に連れて行かれるという表現は少し強すぎる。口語訳は、「今や、わたしは御霊に迫られてエルサレムへ行く」とあり、「迫られて」というのが、感覚的に近いのかと思う。パウロは、そういう聖霊の迫りを受けて、自分が行かなければという迫りの中で、たとえ苦難が待ち受けているとは分かっている、あえて苦難を選択する。パウロのエルサレム行きというのは、そういう事であろうと思う。

そういう苦難を選択する迫り、聖霊の迫りは、私たちにも当然ある。パウロは、苦難について「苦難をも誇りとします。…苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生むということを。希望はわたしたちを欺くことはありません。わたしたちに与えられた聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからです」(ロマ5:3-5)。聖霊の迫りは、私たちに希望の恵みを知らせる迫りであるということである。苦難でさえも誇りに思える聖霊の迫りであることを、私たちは心に留めておきたい。(神谷)